古典期におけるパスタスと ヘレニズム期におけるペリスタイル

古代地中海世界における中庭式住宅の類型に関する研究（その１）

堀　賀貴

感性デザイン工学科

本論は、古代地中海世界における中庭式の住宅の形成過程に関する論考の内、ギリシャ住宅を特徴付ける列柱廊「パスタス」とヘレニズム期を特徴付ける回廊式の列柱廊「ペリスタイル」を中心に扱った部分である。ギリシャにおける「パスタス」は、作業用空間として利用されたが、アッテイカやオリュントスにみられる郊外住宅において、「パスタス」が拡張されて「パスタス-ペリスタイル」へと変化した場合も、その機能は作業用空間であった。したがって、接客空間に用いられたヘレニズムにおける「ペリスタイル」は、「パスタス-ペリスタイル」とは別の機能を持つ空間としてとらえるべきである。

Key Words: *Pastas, Peristyle, courtyards, housing*

はじめに

古代地中海世界における住宅平面を特徴づける空間の一つに中庭がある。現在までに得られた史料の範囲内では、中庭の起源の一つにギリシャにおけるパスタスがある[1)]。パスタスは、横に並んだ複数の部屋の出入口をつなぐ列柱廊のことで、この廊下の列柱側は中庭に向かって開け放ちとなっている(図1)。このパスタスを持つ住宅を「パスタス型」と分類する。シリア地方のドゥラ・エウロポス、小アジアのプリエネ、マケドニア地方のセウトポリス、そしてシチリア島のアクラガスなど、南イタリアを除き、ほぼギリシャ植民都市の分布と重なる（地図）。

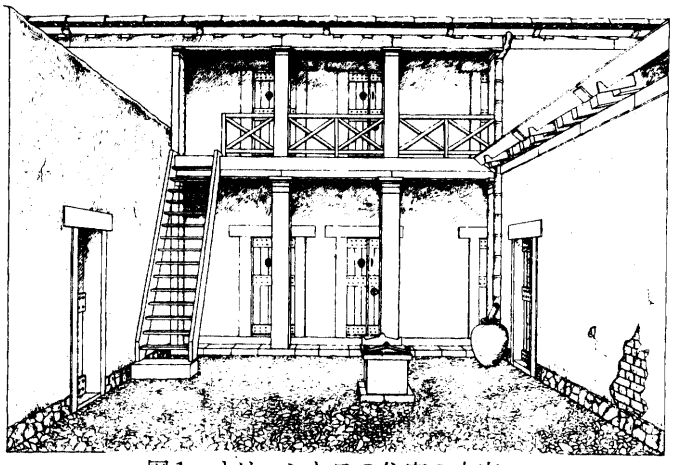
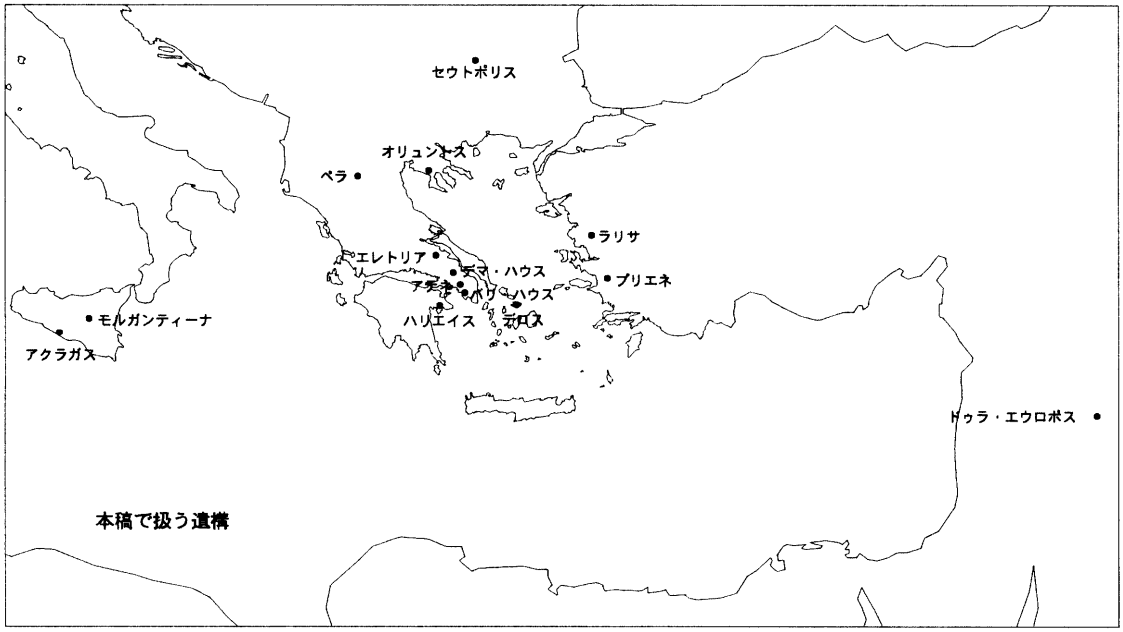


図1、オリュントスの住宅の中庭

ギリシア住宅にはパスタス型以外にも、その特徴



©1998 The Faculty of Engineering, Yamaguchi University

的な空間によって分類される形式がある。プロスタスと呼ばれる間口の広い部屋で、前面にイン・アンティス形式の円柱を持つ空間である[2](図2)。この形式は、紀元前6世紀後半のラリサに見られることからパスタス形式より古い形式とされる[3]。クラシック期からヘレニズム期の初頭にかけてパスタス型がプロスタス型に次第にとって代わり[4]、パスタス形式が確立されるのは、紀元前5世紀後半から4世紀前半にかけてのオリュントスといわれる[5](図1)。その形式は、アッティカ地方の住宅「デマ・ハウス」にもみられ、紀元前4世紀における典型的なギリシア住宅とされる。また、デロスにおいて特徴的なペリスタイル形式は(図3)、四面が列柱廊によって囲まれている中庭のことを指す。このギリシャにおける最後の形式はヘレニズム期に成立し、後のローマ住宅にも大きな影響を与えた[6]。

ギリシャにおけるパスタスは、上記のように古代地中海世界に広く分布する空間であるが、アテネでパスタスを持つ住宅の遺構が発見されていないこともあり[7]、ギリシャ住宅研究は文献資料からの復原考察による部分が大きかった。ディンスムーアは1927年に「古代ギリシアの建築」の中で、「ヘレニズム期あるいはグレコ-ローマン期以前の住宅(遺構)には注意を払う必要はない。」(括弧内筆者)と記した[8]、確かに1930年以前においては、プリエネやデロスで一部住宅の遺構が発掘されていたけれども、決してギリシア住宅遺構に対する関心は高くはなかった。ギリシア住宅研究の先駆者ともいえるライダーは1915年に「ギリシア住宅」を記したが、その内容もほとんどは文献史料からの住宅プランの復原であり、古典期からヘレニズム期の住宅に関する実際の遺構と文献との整合性に関しては言及されていない[9]。

その後、オリュントスの住宅やアッティカ地方のバリ・ハウス(図4)では、中庭向きの複数の面に列柱廊が発掘された。そこで、もとは中庭の一面にのみ配された列柱廊(パスタス)が拡張され、中庭を二面以上をパスタスで囲むことによって、この形式、すなわちパスタス-ペリスタイル型が形成されたと考えられた(図4、オリュントス、紀元前348以前、紀元前5世紀から4世紀前半)。これ以外に、セウトポリス、ペラにも同様の発掘例がある。一方、ペリスタイルも、デロスだけでなく紀元前2世紀のアグリジェントあるいはエレトリアにも見られ、ヘレニズム世界のかなり広い地域に分布する。そこで、パスタス-ペリスタイル型の登場を契機に、パスタス型がパスタス-ペリスタイル型、そしてペリスタイル型へと連続的に変化したのではないかと考えられるようになった。

1970年代後半になると、上記の連続的変化の考え方に影響され、住宅類型の相互の関連性や生活空間の機能に関する研究が登場する。近年のギリシア住宅に関する研究において、最も注目すべきものは1977年のクラウゼ,1983年のウォーカー、1986年のヘプフナー、シュワドナー、1987年のペサンド、1990年のジェイムソンであろう。クラウゼは「ギリシアのパスタス式住宅の基本形」(1977)の中で[10]、従来のプロスタス、パスタス、ペリスタイル形式の住宅に共通する特質(三室からなるユニット)を提示し

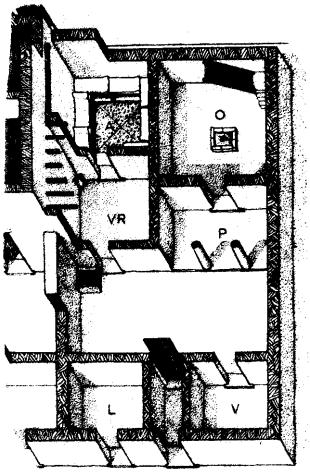


図2、ピラエウスの住宅(Pの部分がプロスタス)

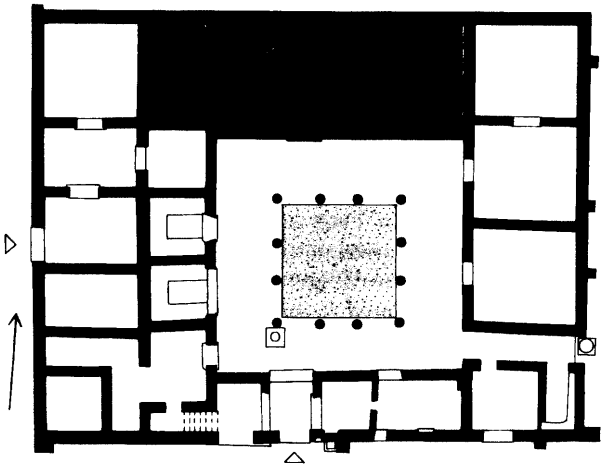


図3、デロスの住宅

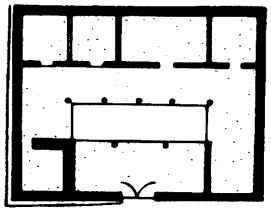


図4、バリ・ハウス

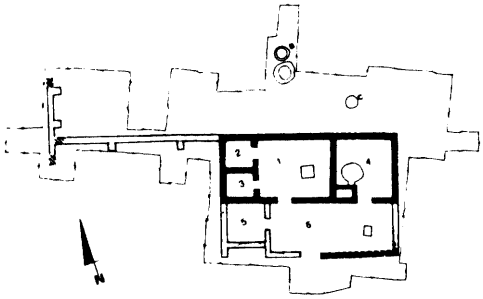


図5、メドマの住宅
(1、2、3の部屋がオイコスユニット)

ている（図5)。おもにキッチンとして使われたこのユニットはギリシャ住宅の特徴の一つと考えられるようになった。また、ウォーカーは「ギリシア古典期の女性とハウジング」(1983)の中で[11]、中庭をとりまく部屋(プロスタス、パスタスにかかわらず)が、女性が利用する生産のための空間であったことを示し、機能面からのギリシア住宅の考察をおこなった。ヘプフナーは、都市別に住宅の規格性を検討することによって、都市計画と住宅平面の関連性を明らかにした[12]。また、ペサンドは、上記の成果を参照しつつ、文献と発掘の資料を統合して検討し、古典期のギリシア住宅の基本形としてのパスタス式を提示した[13]。また、中庭を取り巻く部屋を女性用の空間としたウォーカーに対し、ジェイムソンは、男性用の空間であるアンドロニーティスと女性用の空間としてのギナイコニーティスの区画が、従来のような郭壁として具体的に存在するのではなく、ギリシャ人の意識の中に存在する使い分けであったと指摘する[14]。彼は、住宅内のある部屋が、男性が使えばアンドロニーティスとなり女性や子供が使えばギナイコニーティスとなった事例を紹介している。

2、問題の所在

しかし、前述のような周柱式中庭を持つ住宅の形成あるいは成立に関する研究にもいくつかの問題が残されている。特に、前節において述べたように、連続変化説の根拠ともなるパスタス-ペリスタイル型については、研究者の間に以下に記すような定義の違いがある。

ペリスタイルは一般的には周柱式の中庭のことを指すが、四方を列柱で囲むだけでペリスタイル形式と呼ぶのか、あるいは四方を回廊が巡っているか否か（列柱とは反対側の壁に部屋の出入口があるか否か）を考慮するのかで、研究者の間でも呼び方が異なっている。典型的な例は、オリュントス郊外のヴィラ・グッド・フォーチュン（図6）で、玄関を入って右側の列柱を持つ空間は部屋の出入口を持たない通路なのか、それともパスタスの一変形として考えてよいのか、意見の分かれるところである。プロンマーはペリスタイル形式と呼び[15]、グラハムはパスタス-ペリスタイル形式[16]、ペサンドは単にパスタス形式としている[17]。プロンマーの場合は列柱が四方を囲んでいるだけでペリスタイル形式とし、ペサンドは回廊（部屋付きの廊下）が巡っていない場合にはペリスタイル形式とは呼んでいない。グラハムは両者の中間的な解釈といえる。この問題は、連続変化説の枠組みの中で、パスタス-ペリスタイル型をとらえようとするところに原因があり、ここでは、とりあえず、独立した形式としてパスタス-ペリスタイル型を定義するが、後節においてその根拠詳述する。

もう一つの問題は、1970年以降のギリシャ住宅に関する研究が、異なる視点からではあるが、ギリシア住宅を包括的に理解しようとした試みであり、その目的はギリシア住宅における平面形式の時代変化の中に、普遍的な性質を見いだそうとするところにあったことである。しかしながら、紀元前4世紀以降、特にペリスタイルをもつ住宅が登場する紀元前2世紀頃はギリシャ住宅からローマ住宅への過渡期でもあり、依然として、多くの疑問が残されたままである。研究者も、明確な理由なくパスタス式、プロスタス式からペリスタイル式への連続性を認めている。例えば、ペサンドはパスタス形式からペリスタイル形式への変化の主要因を「所有者の富裕化」と記すのみである[18]。富裕化がペリスタイル型を生み出す一つの要因であったことは否定しないが、富裕化のみを要因として、ペリスタイルという新しい住宅形式が誕生したとは考えにくい。また、ペサンド自身、デロスにおけるペリスタイルの起源について明確に言及していない。

このような見解の違いをもたらす理由には以下があげられる。第一にギリシア住宅とローマ住宅が個別に研究され、両者に共通する住宅形式であるペリスタイルが「ギリシアからローマへと移入された

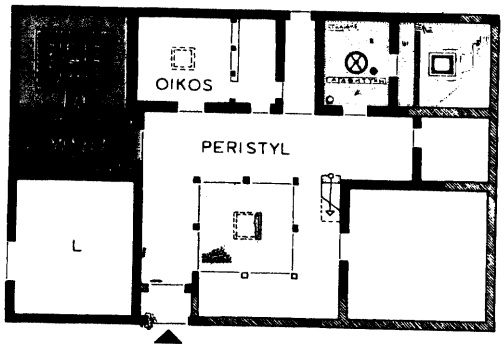


図6、ヴィラ・グッド・フォーチュン

形式」と無条件に規定されてしまうことにある。いいかえれば、ギリシャ住宅史のゴールはペリスタイル型の住宅であり、ローマ住宅史の出発点はエトルリアのアトリウム住宅とギリシャのペリスタイルとの合体によるドムス住宅の誕生なのである。第二に、古代ギリシャ時代に属する住宅遺構の数が、古代ローマのそれよりも圧倒的に数が少ないために、古代ローマ住宅に関する研究に比べ、ギリシャ住宅には不明な点が多いこともあげられるだろう[19]。第三に、上記の議論が、部屋の配置や形状などから平面形式を類型化することによって行われおり、1970年代以前においては、各住宅の持つ建築的な機能、たとえば、換気や採光、立地条件、住宅平面構成などはあまり考慮されていなかったことにも問題がある。

そこで本論においては、現在得られる資料の範囲内で、立地条件、平面構成、あるいは空間の機能など、主に建築学的な側面より、パスタスとペリスタイルを考察し、その類型を再考する。

3、用語の定義

まず本節では、上記のような研究者間の用語の定義、あるいは用法の違いを整理し、本論で扱うべき問題を明確にしておきたい。特に、ペリスタイルの形成を考える場合に、前述の定義のズレは大きな問題となる。

プロンマーの見解を用いれば、ペリスタイル形式は紀元前5世紀後半から4世紀前半にかけてのオリュントスに見られることになるし、ペサンドの見解を用いればペリスタイルの誕生は紀元前3世紀後半から2世紀のデロスとなり[20]、両者には100年以上の開きが存在する。また、ペリスタイルの成立に関しても見解は異なっている。特に、ペサンドは成立時期を最も遅い時期に設定する。すなわち、ペリスタイルの成立を紀元前2世紀のローマの影響下に入ったデロスと見て、直接的なイタリア半島との関連を指摘する[21]。パスタス型を非常に広義の概念としてとらえるペサンドは、ペリスタイル型もパスタス型も決して相対する概念ではなく、部屋をつなぐという意味では、ペリスタイル型もパスタス型の一類型ととらえる[22]。

ここでは、定義と起源を別問題としてとらえる必要性がある。定義に関しては、一致して研究者間でペリスタイルと認められている紀元前3世紀後半のデロスに見られる形式、すなわち四面に列柱廊を巡らす形式をペリスタイル型としたい。また、前述のように複数のパスタスに囲まれている中庭を持つ住宅をパスタス-ペリスタイル型として別の類型として考える。そこで、ペリスタイルの起源に関し上記のようにオリュントスやアッティカの例にまで遡るかどうかという問題、あるいはペリスタイルの形成過程に関わる問題は、ここでは留保しておき、後節に委ねることとする。

また、本論では議論の枠組みとして、住宅の立地条件に関し、別の観点を提起したい。すなわち、郊外住宅と都市住宅である。オリュントス郊外のヴィラ・グッド・フォーチュンやアッティカのデマ・ハウスは、他の住宅、例えば、オリュントス、プリエネ、ピラエウスなどの住宅とは明らかに立地条件が異なる。すなわち、前者は都市を囲む城壁の外であり、後者は城壁の内にある。ここでは、それらの住宅を区別するために、前者を郊外住宅[23]とし後者を都市住宅と呼ぶことにする。例えば、ウォレス-ハドリルは、都市別に住宅の敷地面積の平均を算出しているが[24]、プリエネ、207m^2、ピラエウス、242m^2、オリュントス、294m^{2}となっている、また、郊外住宅に関しては、ヴィラ・グッド・フォーチュンは約426m^2、デマ・ハウスは約352m^2（筆者が平面図上にて計算）であり、敷地面積については、郊外住宅は都市住宅よりはるかに広い[25]。郊外住宅には、農家の機能が要求されるために、居住者数（農作業を担う人々など）が多いことや、作業部屋や貯蔵庫などがあり、部屋数や敷地面積が大きくなることは容易に理解できる。敷地面積や部屋数が増加するということは、中庭を囲む部屋数の増加を意味しており、パスタス型からパスタス-ペリスタイル型への変化も、こうした物理的な敷地面積、部屋数の増加が一因となっているのではないだろうか。この点に関しても、節を改めて考察する。ここでは、従来のギリシャ住宅の類型化において、都市住宅と郊外住宅という項目を付け加えることの必要性を指摘しておく。

4、郊外住宅と都市住宅の機能

クセノフォンはギリシャ住宅について、以下のように記している。「家屋について、おなじ家が美しい家でありまた有用な家であると語ることによって、家はどんな風に建てるべきであるかを教えたように私には思える。（中略）南向きの側を高く建てて冬の陽がさえぎられないようにし、北向きの側を低くして寒い風があたらないように建てることが必要であろう。」[26]

このようなギリシャ人の住宅に対する理念は、プリエネの住宅にも現われている。中庭に面する南向きの部屋では、傾斜地を利用し、各戸が同じような条件で採光が得られるように計画されている。またプロスタスによって、夏の強い日光は遮られ、冬の柔らかい陽は背後のオイコス（居室）にまでとどくようになっている[27]。（図7）

一方、ウォーカーは前出の論文で[28]、中庭をとり

まく部屋(プロスタス、パスタスにかかわらず)が、女性が使用する生産のための空間であったことを示した。オリュントスの住宅やアッティカの郊外住宅の中庭においては、出土物から判断して、脱穀や織物などの生産活動が営まれていたことは明らかである[29]。また、クラウゼの示したオイコス・ユニットも古典期、あるいはヘレニズム期前半においては、調理などの家庭内の作業の場であった[30]。

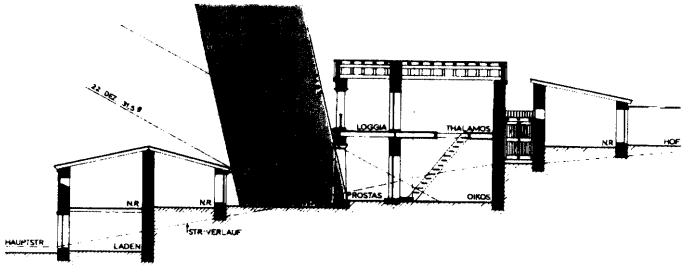


図7、プリエネにおける中庭の機能

そこで、オリュントスの中庭の機能に注目してみると、都市内（市壁内）の住宅でありながら、機能的には郊外住宅（農家）に非常に近いことに気付く。しかも、オリュントスの住宅は計画された区画に建つ規格住宅であり、建設当初より、中庭において農作業が行われることを前提とした設計であり、一種の都市内農家の一面を備えていた。

他方、アテネにおける都市生活へ目を向けてみると、市壁内より郊外へ主な生活の場が移動していたことがわかる[31]。紀元前4世紀には、彼らは、数週間から数カ月間、断続的にではあるが、郊外住宅で生活したと考えられ[32]、都市住宅は、単に社会的な役割を果たすため留まる場所だった[33]。したがって、身の回りの世話をする人を除いて、政治的な役割を果たさない家族や使用人はほとんどが郊外の農場に住んでいたと考えてよい。また、アテネにおいては紀元前4世紀に入っても、都市環境が劣悪だったのは文献史料[34]やヤングの発掘結果[35]からも明らかである[36]。アテネだけでなく、いずれのギリシア都市の住宅も以外に小さいことはよく知られている[37]。しかも、本来都市住宅が担うべき機能であるアンドロニーティス（男性用の接客空間）が、アッティカの郊外住宅、バリ・ハウスの南東の隅にも確認できる。このように、郊外住宅にも都市住宅的要素が内包されていた。

オリュントスの住宅やバリ・ハウスは、都市住宅と郊外住宅の中間的存在であり、以下のクセノフォンの「オイコノミコス」に登場する一種の理想住宅（図8）に近い形式でもある。ただし、文献資料上から得られる住宅平面には注意が必要である。例えば、ホメロスの住宅は紀元前8世紀以前の理想住宅を示す平面と考えられるが、住宅よりは王宮、しかもミュケナイ文明の影響が強いとされている[38]。また、ペサンドの考察に拠れば、ホメロスの住宅には軍事的（防衛的）空間が多く指摘され、必要以上に広大に復原され、理想的な王宮としての意味が強い[39]。したがって、ここでは限定的に、ペサンドが復原を行ったイスコマコスの家（クセノフォン、「オイコノミコス」）、カリアスの家（プラトン、「プロタゴラス」）、エウフィレトスの家（プラトン、「リュシス」）を取り上げる（図9）。郊外住宅であるイスコ

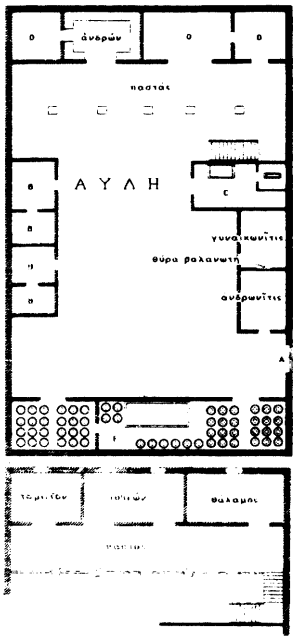
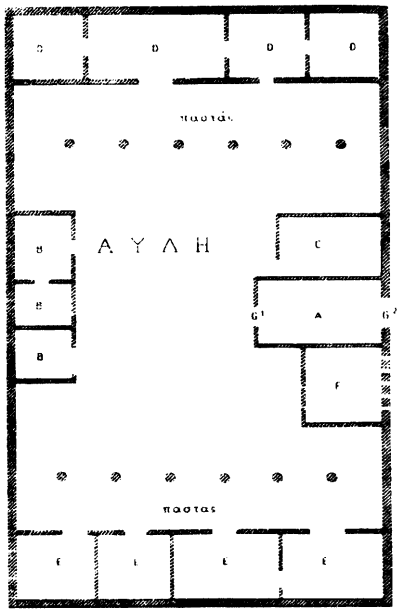


図8、「イスコマコスの家」



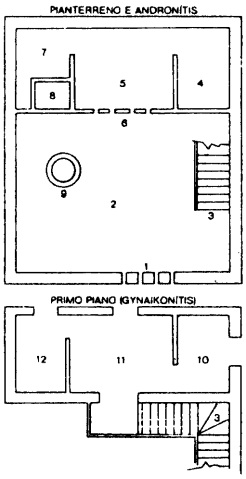


図9、カリアスの家（左）、エウフィレトスの家（右）

マコスの家と都市住宅であるカリアスの家を比較してみると、部屋の用途は若干異なっているものの、似通った平面を示していることに注目したい。南側の部屋の並びは、カリアスの家では住居になっているが、もとは宝蔵であったと記されており、機能的には両者は完全に一致する。これらの住宅平面は、同時代の遺構から判断して[40]、中庭を生産活動の場とするパスタス型あるいはパスタス-ペリスタイル型の住宅を示している。一方で、エウフィレトスの家は、規模的に実際の都市遺構に近く、二階を併設しているのが特徴的である。また、いずれも作品内の登場人物の住居を描写したものであるが、作品の性質上、リシアスのエウフィレトスの家が当時の都市住宅の実情を最も反映していたと考えられる。

イスコマコスの家は、物語の啓蒙書としての性格を考えると理想住宅の要素が強い。また、カリアスの家は2対のパスタスを持ち、都市住宅としては異例の規模で、エウフィレトスの家よりも郊外住宅のイスコマコスの家に近い。物語の設定では、カリアスの家は実存する都市住宅ではあるが、住宅が担うべき機能、すなわち都市における社会生活と田園における生産活動、を共に備えた理想住宅としての側面を持っていた[41]。

これらの文献上の住宅のモデルを実際の遺構に求めるとすれば、郊外住宅としてのイスコマコスの家はバリ・ハウス、作業空間を備える都市住宅としてのカリアスの家はオリュントスの住宅、都市住宅としてのエウフィレトスの家は、ヤングの発掘したアテネの住宅となろう。

しかし、紀元前3世紀におけるアテネ経済の崩壊、アッティカ経済圏の無力化に伴って、理想住宅としてのパスタス-ペリスタイル型住宅は意味を失った。紀元前2世紀のデロスの住宅では、中庭の機能が大きく変質していることは明らかである。ケルドンの家やホメロスの家では、ペリスタイル内では農作業などの生産活動が行われていた形跡は認められず、特に後者ではペリスタイルは接客空間として用いられていた[42]。また、アグリジェントでも同様である[43]。このように、ペリスタイルの機能は、パスタス型やパスタス-ペリスタイル型の中庭が生産活動であったのに対し、デロスのペリスタイルは接客空間であったと考えられ、両者は異質な性格を持つと判断できる。

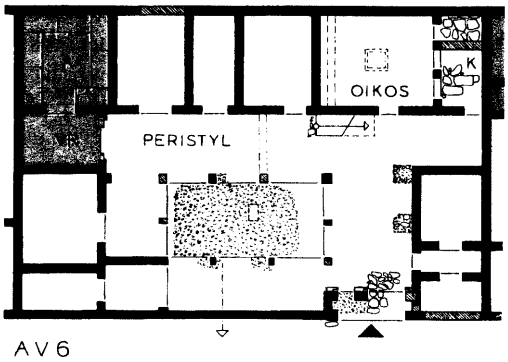


図10、オリュントスの住宅（AV6）

おそらく、ヘレニズム期の後半、デロスが交易都市へと大きく発展した時期（紀元前3世紀終わりから2世紀、この時期に住宅建設が盛んであった）に、田園住宅の周柱式中庭（生産活動の場）が、都市型住宅の周柱式中庭（接客の場あるいは庭園）へと変貌したと考えられる。この変革の前後で周柱式中庭は別の空間に変化したととらえてよい。

したがって、オリュントスやアッティカにおける中庭の例と、デロスの例とはまったく別の空間と考えるべきであり、パスタス型やペリスタイル型の中間的な存在ではなく、完成された独立の形式ととらえるべきである。したがって、オリュントスなどに見られる中庭をペリスタイル型と呼ぶのは適当ではない。

5、ペリスタイル形式の成立

本節では、従来から主張されているオリュントスのパスタス-ペリスタイル型（図10）がペリスタイル型に連続的に変化したという主張、すなわち連続変化説を裏付ける根拠に反論することにより、類型化の問題点を整理する。連続変化説の根拠は以下の4点に整理される。

1）直接的に裏付ける遺構であるプリエネ（図11）とモルガンティーナは、ペリスタイルに改築される前の紀元前2世紀の状態が復原できる。プリエネの住宅の前身はプロスタ

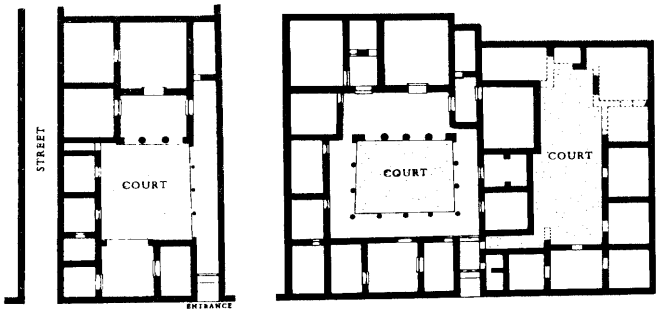


図11、プリエネの住宅（左がオリジナル、右が改築後）

スであり、モルガンティーナのそれはパスタス[44]と考えられる。これらの改築は、中庭に面する部屋を増築するために行われたもので、ペリスタイル型がパスタス-ペリスタイル型より発展して形成されたことを示す実例となる。

2）デマ・ハウス、バリ・ハウス（図3）などの、アッティカの郊外住宅がオリュントスの住宅と非常に近い平面を持つことから、すでに紀元前4世紀において、この平面形式がギリシア文化圏に広く分布していたと判断できる。すなわち、紀元前4世紀の終わりに最も一般的であったパスタス-ペリスタイル形式の住宅の一部がペリスタイル形式に変化した可能性が高い。

3）ギリシャ住宅の連続性を裏付ける特徴に、前述のクラウゼのオイコス・ユニットがある[45]。デロスにおいても見られるこの区画は、古典期のパスタス、プロスタス型よりペリスタイル型住宅に連続する特徴を示している。

4）デロスにおいて、ペリスタイル型とともに、パスタス-ペリスタイル型の住宅が同時に存在する（図12）。

まず、1）では、時間的連続性が主張されている。しかし、ペリスタイルが特徴的に見られるデロスにおいては、出土する遺構の時間的連続性に疑問がある。紀元前3世紀に見られる遺構の空白時期[46]には、歴史的要因が関与している。前述のように、紀元前3世紀にアテネの経済は崩壊し、アッティカの経済圏も完全に活力を失っていた。デロスは前314年にアテネより独立したが、前3世紀には経済活動は停滞する。しかし、前166年に、ギリシャ地方に進出したローマ人によって自由港として指定され、ギリシャとイタリア半島を中継する港として再び繁栄することとなる。また、デロス以外の遺構の出土状況から判断しても、この空白期はデロスのみの特徴ではなく、ギリシャ全土の特徴と考えてよい。例えば、アッティカの郊外住宅は、紀元前4世紀の後半に放棄され[47]、オリュントスも、紀元前348年に破壊されている。

最も古いペリスタイル型住宅の一つであるデロスのケルドンの家が紀元前3世紀後半から2世紀とされ、この空白期の直後であることを考えれば、デロスのペリスタイル型住宅が、ギリシャ、ローマ双方から強い影響を受けて形成されたと考えたほうが妥当である。しかも、デロスのペリスタイル型住宅とアッティカやオリュントスの住宅が一時期にでも同時に存在した事実はなく、両者の間に時間的な連続性はない。

そこで1）の根拠を再検討すれば、パスタス-ペリスタイル型住宅がペリスタイル型住宅に連続的に変化した例ではあるが、変化の起こった時期に問題が残る。というのは、デロスのケルドンの家が紀元前3世紀後半から2世紀であるのに対し、プリエネやモルガンティーナの例が、空白期の後である紀元前2世紀であり、ケルドンの家とほぼ同時かあるいは後の時期の改築になる。地理的な条件からペリスタイル型の伝播に時間を要したという判断もできるが、すでにデロスに登場していたペリスタイル型を模倣して上記の住宅が改築された可能性も指摘される。紀元前2世紀、古代ローマ帝国の勢力下に組み込まれることによって、ギリシャ本土から離れたプリエネやモルガンティーナにおいて生き残っていたパスタス-ペリスタイル型住宅が、急速にデロス化したという解釈も可能である。

2）においては平面形式の連続性が主張されている。確かに、パスタス-ペリスタイル型とペリスタイル型住宅の平面形式が類似していることは否定できない。しかし、別の見方をすれば、前節において指摘したように、アッティカの郊外住宅やオリュントスの住宅には、農作業用の空間という機能上の類似性がある。オリュントスの住宅では、中庭から農作業用の道具が発見されていることはすでに記した[48]。おそらく、農作業の過程や方法が、オリュントスとアッティカで大きく異なることはなかったであろうから、結果的に似通った平面となるのは必然的である。すなわち、パスタス-ペリスタイル型住宅は農家あるいは農作業場を併設した住宅として広く分布していたと考えるべきである。一方、デロスの都市住宅における接客空間としてのペリスタイルはまったく異なる機能の空間であり、両者には平面形式の連続性は認められるが、機能の連続性は認められない。

3）における、オイコス・ユニットは、パスタス-ペリスタイル型住宅とペリスタイル型住宅を関連付ける唯一の根拠となる。しかし、こうしたユニットは、ヘレニズム期には、住宅以外の公共施設にも広まっており、この場合、キッチンではなく、準備室、控室として利用されており、もはや住宅の特徴とは

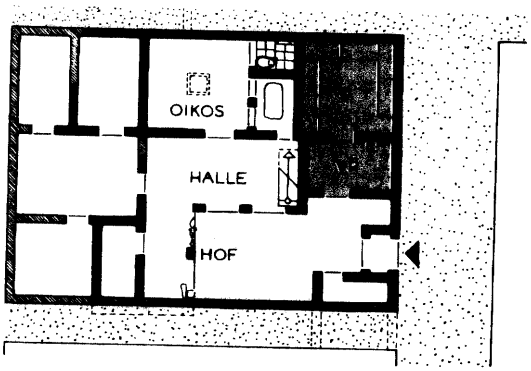


図12、デロスのパスタス-ペリスタイル型住宅

認められない[49]。ロイターは、このユニットをヘレニズム期の建築全般における特徴としており[50]、ある程度平面形式の類似性を残したまま、機能が変質していった過程が読み取れる。したがって、2）の根拠同様、平面形式の連続性は認められるが、機能の連続性は認められない。

4）における、デロスに見られるパスタス-ペリスタイル型の住宅も、オリュントスに見られる中庭とは、別の機能を持った空間であり、平面類型的には近いが別の空間と認識して良い。むしろ、パスタス-ペリスタイル型の中にも、都市住宅においては接客空間として利用された例と理解できる。

これまでの考察から、デロスのペリスタイル型は以前のパスタス-ペリスタイル型住宅との平面形式上の共通点（オイコス・ユニット）を備えながら、空白期の後に登場したと考えられる。しかし、前節にも記したように、デロスのペリスタイル型は、以前のパスタス-ペリスタイル型の住宅の中庭と機能的にも大きな相違点を示しており、結果として異質な空間に変化していた。

以上より、パスタス-ペリスタイル型からペリスタイル型への変化は「平面形式」の連続性あるいは類似性にとどまり、「時間的」あるいは「機能的」連続的変化とは認められない。

6、まとめ

デロスに見られる中庭の四面に列柱廊を備えた形式に特徴付けられるペリスタイルは、単なる平面形式上の類似性にとどまり、機能的にはパスタス-ペリスタイル型とは別の形式である。すなわち、郊外住宅におけるパスタス-ペリスタイル型の中庭が作業用空間であるのに対し、都市住宅におけるペリスタイルは、接客空間であった。特に後者は、ローマ人の影響の強まった紀元前3世紀後半から2世紀はじめに形成され、イタリア半島での中庭式住宅の形成に深く関わっている。そこで、次稿では、イタリア半島におけるペリスタイルの移入と新しい中庭式住宅の形成について考察する。

註

1)Graham, J. W.: Origins and interrelations of the Greek house and the Roman house, Phoenix, Vol.20, p6, 1966
2) Ibid.
3) Lawrence, A. W.: Greek Architecture, Baltimore p. 239, 1957,
4) Plommer, H.: Ancient and Classical Architecture, London, p.252, 1956
5) Martin, R.: L'urbanisme dans la Grèque Antiqeu, Paris, p.225, 1956
6) Plommer, H.: op.cit., p.204、以下のギリシャ住宅の形成過程は、Lawrence, A. W.:op.cit. pp.315-31 による。
7) ギリシャにおける文献資料は、ほとんどアテネに関するものが大部分である。
8) Dismoor, W. B.: The Architecture of Ancient Greece, London, pp.184, 1927
9) Rider, B. C.: Greek House, London,1915
10) Krause, K.: Grundformen des Griechischen Pastashauses, AA 92, pp. 164-179, 1977
11) Walker, S.: Woman and housing in Classical Greece: The archeaological evidence, Images of Women in Antiquity ed. Cameron, A. and Kuhrt, A., pp. 81-91, 1983
12) Hoepfner, W., Schwandner, E-L.: Haus und Stadt im Klassischen Griechenland, München, 1986
13) Pesando, F.: Oikos e Ktesis La casa greca in età classica, Perugia, 1987
14) Jameson, M.: Private space and Greek city, in O. Murray and S. Pricw (eds.), The Greek City from Homer to Alexander, Oxford, pp.171-98, 1990
15) Plommer, H.: op.cit., p204
16) Graham, J. W.: op.cit., p12
17) Pesando, F.: op.cit. p171
18) Pesando, F.: Oikos e Ktesis La casa greca in età classica, Perugia, 1987
19) ギリシャ住宅ついては、基礎や壁の底部しか残っていない例が多く、住宅の復原は難しいとされてきた。しかし、1980年代以降の発掘成果や、近年の研究によって、ギリシャ住宅の復原考察が可能になってきている。
20) Vallois, R.: L'architecture hellènique et hellènistique de Dèlos, Paris, p206-220, 1944
21) Pesando, F.: op.cit. グラハムも、すでに1966年に同様の関連を指摘している。Graham, L. W.: op.cit
22) Pesando, F.: Ibid. p155-160
23) 古代ローマでは、ヴィラ・ルスティカ（農業別荘）という呼び名があるが、ここでは、都市外にある住宅をすべて含める意味で「郊外住宅」と呼ぶことにする。
24) Wallace-Hadrill, A.: Houses and Society in Pompeii and Herculaneum, Princeton, pp.72-82, 1994
25) 復原考察では、ともに2階とされており、床面積を比較した場合も、その差は同じ程度か大きくなる可能性が高い。
26) クセノフォン、「ソークラテースの思い出」、第三章、8節、佐々木　理訳、岩波書店
27) Hoepfner, W., Schwandner, E-L.: op.cit. p.319
28) Walker, S., op.cit.
29) Robinson, D.M.: Olynthus VIII The Hellenic House, Baltimore, 1938
30) Walker, S.: op.cit.
31) アッティカの社会状況を考慮してみると、紀元前5世紀の最盛期に、アテネの都市人口は13万人、アテネとペイラエオス郊外の農村に約23万人の人口が推計されている。急峻地の多いアッティカ地方にこれだけの郊外人口があったことは驚くべきことであり、他の地方と比較しても圧倒的な数字であろう。実際的に考えて、政治の中心は都市アテネであったが、生活の中心はもはや郊外にあったといえる。
32) Pecírka, J.: Homestead farms in classical and HEllenistic Hellas, Problèmes dela terre en Grèce ancienne, 1973
33) Jameson, M. J.: Domestic space in the Greek city-state, Domestic srchitecture and the use of space, 1990
34) アリストテレス、政治学、1330b や Xenophon, 収入について、ii, 6 政府による賃貸住宅の提案など
35) Young, R. S.: An Industrial District of Ancient Athens, Hesperia XX 3, 1951
36) タッカー、T．G .:『古代アテネ人の生活』、岩波書店、1975 なども参照。
37)Hoepfner, W., Schwandner, E-L.: op.cit. pp.322-30
38) Wycherley, R.E.: 『ギリシャ都市の都市構成』、相模書房，pp.202-23, 1962
39) Pesando, F.:Oikos e Ktesis La casa greca in et classica,Roma, pp.63-91, 1987
40) 先に取り上げた遺構の他に、Travlos, Y.: Bildelexicon zur Topographie des Antiken Athen, NewYork, 1971
41) Jameson, M. J.: op.cit.
42) Derome, J.: La Maison Dite de L'Hermès a Dèlos, BCH 77, 1953, pp.444-496
43) Gabrichi, E.: Agrigento, scoperte di 1916-24. Abitazione romane presso la chiesa di S. Nicola, NSc 50, pp.424-37, 1925
44) Stillwell, R.: Excavation at Morgantina (Serra Orlando), 1962 Preliminary Report VII, AJA 67, 1963
45) Krause, K.:op.cit.
46) Bruneau, P.: Contribution a l'histoire urbaine de Délos a l'époque Hellénistique et a l'époque impériale, BCH 92,1968, デロスは紀元前

5世紀に遡る遺構が存在し、ローマ期にも反映した都市であるが紀元前3世紀の遺構が欠落している点が指摘されている。

47) Jones, J. E.: The Dema house in Attica, BSA 57, 1962 and Jones, J. E., Graham, A. J., Sackett, L. H.: Attic country house below the cave of Pan at Vari, BSA 68, 1973

48) Robinson, D. M., Graham, J. W.: op.cit.

49) Lauter, H.: Die Architektur des Hellenismus, Darmstadt, pp.223-286, 1986

50) Ibid.

図版出典

図1、Hoepfner, W., Schwandner, E-L.: Haus und Stadt im Klassischen Griechenland, München, 1986, Fig.76

図2、Hoepfner, W., Schwandner, E-L.: op.cit., Fig.33

図3、Hoepfner, W., Schwandner, E-L.: op.cit., Fig.306

図4、Jones, J. E., Graham, A. J., Sackett, L. H.: Attic country house below the cave of Pan at Vari, BSA 68, 1973, Fig.4

図5、Guzzo, P.G.: Le città scomparse della Magna Grecia seconda ed., Roma, 1990, p255

図6、Hoepfner, W., Schwandner, E-L.: op.cit., Fig.87

図7、Hoepfner, W., Schwandner, E-L.: op.cit., Fig.303

図8、Pesando, F.: La casa dei Greci, Milano, 1989, Fig.48

図9、Pesando, F.: op.cit., Fig.40,42

図10、Hoepfner, W., Schwandner, E-L.: op.cit., Fig.87

図11、Lawrence, A.W.: Greek Architecture 4th ed. , London, 1983, Fig.316

図12、Hoepfner, W., Schwandner, E-L.: op.cit., Fig.68

(1997.10.15 受理)

PASTAS HOUSES IN THE CLASSIC PERIOD AND PERISTYLE HOUSES IN THE HELLENISTIC PERIOD

THE DEVELOPMENT OF COURTYARD HOUSES IN ANCINET MEDITERRANEAN WORLD (PART 1)

Yoshiki HORI

This paper is the first part of a researches concerning the development of housing in ancient Mediterranean World. This part is centred around Greek "Pastas" and Hellenistic "peristyle"; types of colonnaded corridors around courtyards. From the premise the pastas courtyards in country houses functioned as working areas, and extended pastas courtyards at Olynth and Attica called pastas-peristyle courtyards, which were surrounded by two or three colonnaded corridors, also did. While the peristyle courtyards in town houses at Delos acted as a service areas. The peristyle courtyards made the basic difference in the functioning of central courtyards from the end of the third century B.C. to the second century B.C.